

## 言葉と言葉の間

沖縄県立開邦中学校 三年 新屋 太洋

私は「静寂」というものが嫌いであった。その中でも特に会話中の静けさ、話題を振ってくれるまでの静寂が何より苦手であった。

私の性格上「何もない」ということは受け入れ難いことなのだろう。少し混雑しているような環境でほとんどをすごしてきたのだ。家族との雑魚寝は小学校高学年まで行ってきたし、何より父の片付け嫌いを受け継いだこともあって私の周りは常に混雑、汚いといった状態だったのだ。

話がそれたが、とにかく私は「静寂」を嫌っているのだ。

ただ一つ、私が好きな「静寂」は人が何か言おうとして考えこんでいるときなのだ。こうなったのは中学校一年生くらいのときであろうか。

私の通う中学校は県内のいたるところから人が集まっており、小学校の友人はほとんどいなかった。私は一日中教室の隅で一人でいるようになり、話をする友人もいなかった。

そんな私に声をかけたのは今も仲良くしている友人だった。だが、私は人見知りなのもあって言葉につまってしまった。言いたいのに言葉がわからない、「もどかしい」という感情に気付いたのはこの頃かもしれない。

自分でも焦りを覚える中、私は不安になってそのクラスメイトの顔を見た。すると彼は「焦らなくていいから。」と言い、待っていてくれた。私は何とか会話をし、その後も話かけることが多くなっていった。

私が言葉の間のもつかに気付いたのはこのときである。それから二年が経ち、私の友人も多くなり、皆の前で話すこともあった。ギャグをとばしてウケなかったときの間、英語が出なくて言いよんどんでいるときの間、話の返答で何を言えばいいか考えているときの間、様々な間を経験していくうちに私はい間のもつかについてある考えを持つようになった。

前述した間は「全く何もない静寂」ではないのだ。全て自分の中にある感情をどう表現したらよいか考えついた末に「静寂」になったのである。

いや、もはや「静寂」と「間」は全く別のものと言ってよい。静寂は心の中も外も

静かになって生まれるものである。

対して「間」は見たままでは静かでも心の中はどうしようかと荒れ狂っているものを言うのではないか、と思う。

言葉とは二つ以上のものに切り離し、再びつなぎ合わせることでできないようにするものである。様々な感情の混ざりあう心の中には言葉は何もできない。

混ざりあう感情を表すとき人はどうするか。しばらく黙り、そして何とかできる限り近い言葉を探し出して言う他に無い。

つまり、人のややこしい感情を正確に表現するには「間」しか無いわけである。

「間」のもつ力とはこれであろう。

私は今日も会話をし、「間」のもつ力を巧みに使わざるを得ないだろう。「間」のもつ力を完全に理解できたとき、会話はより一層よくなっていくに違いない。